

トムラウシ山南沼汚名返上プロジェクト 始動

牛嶋 あすみ（北海道十勝総合振興局保健環境部環境生活課自然環境係）

【きっかけ】

今年から、「山の日」が始まるということで、環境省、帯広市役所、十勝総合振興局の担当が集まり、「山の日」のPRイベントを企画してはどうかと話し合いを始めたことから当該プロジェクトについて検討する話が始まった。環境省上士幌自然保護官事務所原澤自然保護官の話によると、トムラウシ山南沼野営指定地のトイレ問題は深刻で尿尿やティッシュペーパーがそこら中に捨てられており、悪臭も立ちこめる、とても汚い野営場であるという。当然、山の日PR事業としては、登山者に対して十勝の山をPRするとともに、山をきれいに利用してもらうことを問いかける内容にしようということになり、こうして実施したのがいくつかの山の登山口で登山者に携帯トイレを配布する、携帯トイレの普及啓発事業だった。

事業は平成28年8月6日（土）、7日（日）の2日間に渡り実施し、環境省、森林管理署、帯広市、新得山岳会、山のトイレを考える会、十勝総合振興局が手分けをして、トムラウシ山短縮登山口、ニペソツ山登山口、十勝幌尻岳登山口、伏見岳登山口の4箇所で携帯トイレの普及啓発運動を実施した。トムラウシ山では、環境省が簡単に携帯トイレを持っているかどうかの聞き取り調査を実施したところ、68人中32人が携帯トイレを所持していなかった。半数は持っていたという結果でもあり、短縮登山口の利用者の携帯トイレの所持率は思っていたよりも低くはなかった。この結果からはトムラウシ山の短縮登山口から登山をする人以外への対応も必要なのではないかと感じている。

事業を実施した結果、やはり、しっかりとトムラウシ山南沼野営指定地について取り組む必要があるのではないかと感じ、どうしたらよいのかと考えてみたが、山の素人である私自身が単独で取り組むには難題であった。



（トムラウシ山短縮登山口での普及啓発イベント）

平成28年8月



十勝「山の日」
コラボ・キャンペーン

2016 8/1 (月) ~ 8/15 (月)

① 大雪山・日高山脈 山のマナーアップ運動

② 山の日記念企画展
「平原の母、大雪山・日高山脈を想う祝日」

③ クローズアップ「山の日」
詳しくはウラへ！

主催 環境省北海道地方環境事務所、北海道十勝総合振興局、帯広市
共催 十勝西部森林管理署、十勝西部森林管理署大夏支署
協力 大雪山国立公園道徳協議会、山のトイレを考える会、北海道旅客鉄道株式会社、上士幌町、上士幌町観光協会、新得町、新得山岳会、十勝管内各図書館

山にでかけよう
山に親しみ、山の恵に感謝。

平成28年から8月11日は国民の祝日「山の日」です
日本は国土の7割近くを山地が占める山国です。日本人は、古くから山に畏敬の念を抱き、森林の恵みに感謝し、自然とともに生きてきました。山の恵みは清流を生み、田畑を潤して食料の恵みを与えてくれました。深く自然生活とかわりながら、豊かな心を育んできました。

「山の日」は山の恵みに感謝するとともに、美しく豊かな自然を守り、次の世代に引き継ぐことを期する日です。「山の日」をきっかけに、山に親しみ自然を愛するとともに、山との関わりかたについて考えてみましょう。

十勝「山の日」コラボ・キャンペーン

① 大雪山・日高山脈 山のマナーアップ運動

<場所・日時>
ニベツツ山、トムラウシ山、十勝幌尻岳、伏美岳の各登山口
8/6(土)・8/7(日) 早朝～

<内容>
いつまでも奥深く、美しい山であるように、携帯トイレやゴミ袋を配布し、登山者にマナーアップを呼びかけます。

② 山の日記念企画展
「平原の母、大雪山・日高山脈を想う祝日」

<場所・日時>
・帯広市役所 : 8/1(月) ~ 8/7(日)
・帯広駅東コンコース : 8/8(月) ~ 8/12(金)
・ひがし大雪自然館 : 8/1(月) ~ 8/15(月)

<内容>
十勝の美しい山岳景観や、山岳環境の保全活動の様子をパネルや写真で紹介します。

夏休みの課題にぴったり！

③ クローズアップ「山の日」

<場所・日時>
十勝管内各図書館
8月上旬 ~ 中旬 ※図書館によって異なります。

<内容>
山や自然に関する書籍を集めた特設コーナーを設置します。

図書館にはどんな本があるのかな？ 山や海、花に鳥に昆虫、いろいろな本に出会い、身の回りの自然について考えてみよう！！

(環境省、帯広市役所、十勝総合振興局で実施した「山の日」PR イベントチラシ)

【山にある北海道の施設の状況】

トムラウシ山には北海道の施設として、ヒサゴ沼避難小屋、南沼野営指定地の携帯トイレブース、短縮登山口のバイオトイレ、トムラウシ園地公衆トイレがある。どの施設も老朽化しており、改修が必要な箇所が多く非常に大きな課題となっている。しかし、老朽化の問題は確かにあるのだが、それよりも気になったのが施設の使用状況だった。南沼の携帯トイレブースや短縮登山口のバイオトイレはきれいな状態が保たれており、汚くて使用したくないという気持ちにはなかったが、トムラウシ山の麓、宿泊施設の側にあるトムラウシ園地の公衆トイレは一番汚く、使用したくないという状況であった。

南沼のトイレブースは北海道が新得山岳会に対して春の設営、秋の閉設の作業を委託しており、適正に管理をしていただいている。委託といっても少額しか払うことができおらず、新得山岳会にはかなり大きな協力をいただきトイレブースを維持している状況だ。短縮登山口のバイオトイレも同様で、新得町役場がバイオトイレの清掃を地元の会社に委託してくれていることできれいな状態を保つことができている。一方で、トムラウシ園地公衆トイレは、だれが清掃しているのかわからない状態が続く、登山者のゴミ捨て場と化していた時代もあるという。現在も、ゴミの放置などがぼつぼつとあり、だれかがやってくれるだろうという安易な気持ちからゴミを置いていく登山者、汚いまま放置する、私た

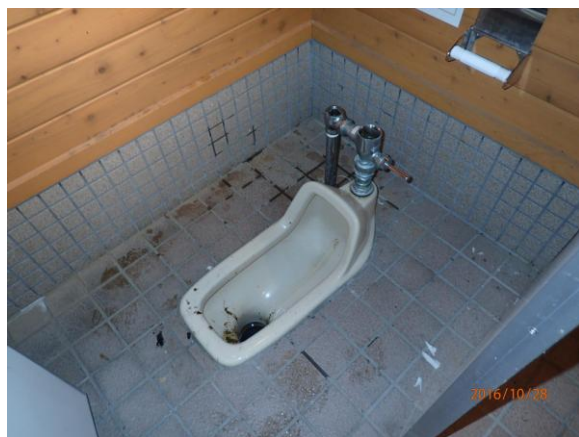
ち行政も含めた関係者が問題意識を持ってこなかったことに起因し、一時のひどく汚い状況は脱したもののトイレが汚い状況が未だに続いている。

このことは、日常的な維持管理が非常に大切だと言うことを私に実感させ、地元との連携、地元と協力関係を作りながら、きれいな施設を維持していかなければならないということに気付かされた。当然、北海道の持ち物であるため、自分たちが率先して維持管理に努めなくてはならないが、毎日現地に行くことは不可能であり、きれいに使用してもらい、施設を長く維持するためには、地元の方と共通認識を図りながら、連携して維持管理を実施していかななくてはならない。同様に南沼野営指定地のトイレシステムを構築し、維持管理していくには、地元関係者との連携が不可欠なのである。



(南沼野営指定地トイレブース)

※ きれいに使用されている



(トムラウシ園地公衆トイレ)

※ 汚い。トイレットペーパーも補充されていない

【トムラウシ山南沼野営指定地の現状とこれまでの対応】

トムラウシ山は、日本百名山の1座として知られ、美しい景観にあこがれた登山者が道内外から多く訪れる山であるが、一方で美観を損ねる南沼野営指定地のトイレ問題が年々深刻化しているのは周知の事実である。私も初めてトムラウシ山に登り現状を確認してきたが、野営指定地の至る所からトイレ道が延びており、高山植物が失われ、裸地化した道は土壌浸食が起きていた。もし、トイレ道の問題を私が知らなければ、当然、そのトイレ道を利用してトイレにいくだろうと思われる。他の登山客にとってもトイレ道を利用することに何の抵抗もなく、罪悪感も感じないことから頻繁に利用され、結果としてトイレ道はどんどんしっかりとした道になり延伸化していくという悪循環ができあがっている。また、排泄物の放置とティッシュペーパーの散乱は目に余ると感じた。「白いティッシュの花」とバカにされるほど、多くの排泄物やティッシュペーパーが放置されており、きれいなお花畑の景観を台無しにしている。悪臭も漂うことがあり、日本百名山にして道内でも有数の環境の悪さを誇っている。

この惨状に対して、行政が取り組んできた歴史は浅い。平成12年から平成16年に宿泊施設や山岳ガイドに携帯トイレを置いてもらい登山者に無料配布を実施したこと、及び、平成14年には携帯トイレブースを1基南沼の野営指定地に設置し、それに伴い登山口に回収ボックスを2箇所設置したことに留まる。この携帯トイレブースが現在も利用されているトイレブースであるが、設置以降、取組を継続してこなかったことから、施設はあるが利用が促進されていない状態が続いている。平成16年から問題が放置され、対策について話し合う場すら設けられてこなかったことから状況が悪化し続け、現在に至っている。



(南沼野営指定地トイレ道)

※ 岩陰へ向かう長い道が続いていた。

【トムラウシ山は新得町にある大切な地域資源である】

トムラウシ山は貴重な自然が存在し、天然記念物として指定されている新得町の大切な地域資源である。しかし、山頂付近の状況などは興味のある人、登山をする人しか確認・認識をしておらず、環境が悪化していても大きな問題として取り上げられてこなかった。このことは、私たち行政がもっと環境保全の必要性を訴えるなど、取組をしてこなければならなかったことだったと考える。登山者のためだけのトムラウシ山ではなく、新得町民、北海道民、多くの人にとって大切なトムラウシ山であるはずだ。その認識に立ち、環境保全を訴えることも行政や地元の大切な役割であると考えている。

このことから、まずは地元十勝の人たちにトムラウシ山に対する問題意識を持ってもらうため、十勝毎日新聞社に依頼し、平成28年度は「山の日」の企画としてトムラウシ山のトイレ問題について連載記事を掲載してもらった。(記事については、添付した資料のとおり)

この記事が掲載したことが小さな一歩となり、私たち行政が地域の人たちと地域課題に取り組んでいくための場を設ける、という次の一歩へつながった。トイレ道の回復を図るという活動を進めていくことも大切な役割であるが、トムラウシ山の環境保全について、新得町民や十勝管内の住民へ訴えて行くこともまた大切な役割であると考えている。そのためにも十勝毎日新聞社等と更に連携した事業を展開し、地域にトムラウシ山を守ることに対する応援団を増やしていくことで継続した取組につなげていきたい。

【トムラウシ山南沼汚名返上プロジェクト 始動】

平成29年4月より、トムラウシ山南沼汚名返上プロジェクトが開始する。これまで長らくトイレ問題について話し合う場がなかったため、まずは、会議の設置を4月に予定している。会議のメンバーは、環境省上士幌自然保護官事務所、林野庁十勝西部森林管理署東大雪支署、北海道上川総合振興局、新得町、十勝山岳連盟、新得山岳会、山のトイレを考える会、北海道十勝総合振興局をもって構成する。

主に考えている事業としては次のとおり。

①トムラウシ山南沼野営指定地現地調査

トムラウシ山南沼野営指定地の入り込み状況や携帯トイレの使用状況等の実態調査を実施することとする。アンケート調査の方法は会議の中で検討していこうと考えているが、関係機関で手分けをして、実際に南沼に赴いて宿泊している登山客に対して聞き取り調査を複数回実施するなど、現地の実態を把握することがまずは大切と考えている。実態調査は複数年実施し、これからの対策にフィードバックしていく。

②トイレ道の延伸を止める対策

トイレ道をこれ以上広げない対策は複数年かけて実施していかなくてはならないが、平成29年度実施することとしては、トイレ道の入口に進入禁止の杭とロープを張り、人がトイレ道に入りにくいような心理的な障壁を設けることを考えている。また、裸地化したトイレ道の植生回復を図るための事業も実施していくこととし、平成29年度はトイレ道にヤシネットを設置することを試験的に実施してみたいと考えている。この事業については、まずはやってみて、検討して繰り返し、手探りで進めていくことになるので、時間をかけて進めていきたい。

③携帯トイレの普及啓発活動

携帯トイレの普及啓発には、登山者が地元で携帯トイレを調達できる仕組み作りや、登山者に対して、山のトイレ問題を提起するイベントや情報発信などを実施し、携帯トイレの所持を促す活動を実施する。また、一般の世論を喚起するため、山のトイレ問題を一般向けに問題提起する事業や、山岳環境整備活動をPRする事業を実施する。

普及啓発活動の数が多くなればなるほど、世の中に対して、トムラウシ山の窮地を知らせることにつながり、協力の輪が広がっていくと思う。きっと、これからたくさんの協力者が現れ、現在では考えられないいろいろな事業に展開していけるのではないかなと思うので、実は普及啓発の事業はとても大切だと考えている。

大きく分けると、これらのことを実施していきたいと考えている。特に実態調査などを分析し、これから南沼野営指定地のトイレの仕組みをどのように整備していったら良いか長期的な計画を作り上げていかなければならない。固定トイレがやはり必要なのか、それとも、携帯トイレブースをもっと増やしていくのか。増やすとすればいくつが適正な数なのか。これを数年後には決定する。そして、もうトイレ道ができることのないト

イレシステムを作っていかななくてはならない。

もちろん施設の整備をすれば、維持管理の作業や費用が発生するのである。これを、一機関に押しつけることなく、地域で連携してシステムを支えていく。このことが一番大切なことだと考えている。会議を立ち上げるのはほんの一步にすぎず、地域で課題を共有し問題を解決するその仕組みを継続していくことが目標である。

今できる一步を今年、踏み出し、平成29年度に会議を立ち上げる準備ができたところだ。毎回毎回、今できる一步を踏み出した先に、トムラウシ山の環境保全が実現する。その道のりはまだまだ長いと思う。とは言いつつも、あまり気負わないでみんなで楽しく進めていきたいなと考えている。



(トムラウシ山短縮登山口バイオトイレ)

携帯トイレ回収ボックスが設置されている



(トムラウシ園地公衆トイレ)

携帯トイレ回収ボックスが設置されている

山汚す白い花

南沼野営地のトイレ問題



南沼の岩陰に散乱するティッシュや汚物
(7月26日、上士幌自然保護官事務所提供)

大雪山系への十勝側入り口を、峰への分岐点にあり、テントを設け立つ「トムラウシ山」(2141m)で、野営地に指定されている。日本百名山の1座として知られ、美しい景観に憧れ、道れるベース地として人気が高い。内外から多くの登山客が足を運ぶ。一方で、美観を損ねる問題が、トイレはない。携帯トイレ用年々深刻化している。登山道を外に便座を設置し、木の板で囲われた岩陰には、登山客の排せつ物とティッシュペーパーが放置されている。風化せずに残った便所紙は、軽蔑の意を込めてこう呼ばれる。「白いティッシュの花」とい。新得町の登山口から登って、くま、山頂手前広がる標高約1950mの南沼。悪臭や十勝岳連

トムラウシ山に放置されるティッシュ

延びるトイレ道 植生に影響



テントが並ぶ南沼の野営地の左側に、携帯トイレ用フースがあるが、岩陰に向かい、トイレ道ができていく。(上士幌自然保護官事務所提供)

山客からは「野営地に固定トイレがあれば」と指摘する声があった。ただ、環境省や南沼に携帯トイレフースを設置した十勝総合振興局は固定トイレの設置には消極的だ。設置費用の財源確保のほか、くみ取りや排せつ物の運搬などの維持管理の難しさを理由に挙げる。

固定式は消極的
難しい維持管理

トムラウシ山の北側、ヒサゴ沼避難小屋(新得町)にあるトイレは、底板のないくみ取り式。設置から19年がたった2001年に人力で排せつ物をかき出し、ヘリコプターで搬

登山者を悩ます
排せつ物と悪臭

トムラウシ山を含む大雪山国立公園を管轄する環境省上士幌自然保護官事務所は、7月26日に南沼の清掃を行った。悪臭を放つ人ふんやティッシュの放置は30カ所。同日に清掃したにもかかわらず、1カ月足らずで目を覆う状況が広がっていた。問題は悪臭だけではない。南沼は風通しが良く、人から見えない場所でもトイレを済ませようと、野営地が

離れた所へ行くための「トイレ道」ができていく。同事務所の原田翔太自然保護官は「トイレ道は4、5本。長いもので約1000mもある」。事態は深刻だ。

一度できたトイレ道も排せつ物の痕跡があり、登山客は別の岩陰を求めようとする。こうして道は分岐・複雑化していく。南沼野営地の周辺の高山植物などの植生は徐々に壊され、裸地に変わってきた。

どうすればトイレ道の拡大や排せつ物の放置が減らせるのか。登る。

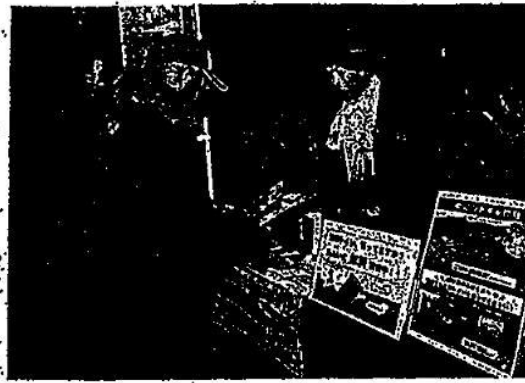
出た。十勝支庁(当時)が用意した予算は1000万円に上った。十勝総合振興局環境生活課の島根崇雄氏は「ヒサゴ沼のトイレでは、便槽に空き缶などのゴミが投入されていた実態もある。登山客の意識に訴える対策が必要だ」と話す。

◆ ◆

今年から施行される「山の日」(8月1日)に合わせ、多くの登山客でにぎわうトムラウシ山のトイレ問題について、上下2回にわたって考え(深澤慶太、池谷哲)

山汚す自の花

園治野営地のトイレ問題



道内最悪とも称される園治野営地。道の状況を改善するため、行政が取り組むのは「携帯トイレの普及」だ。

携帯トイレは排せつ物を吸水・凝固させるシートが入ったミニトイレ。南沼の携帯トイレブースの中にある便座にくくりつけて使用できる。使用後は口を結び、付属の袋に入れ、登山に適したものは1個500円ほどで入手できると話す。

使用後は持ち帰るのが基本だが、トムラウシ山では、十勝総合振興局が温泉側と短絡路の登山口2カ所に回収ボックスを設置。新得町が定期的に処分している。

環境省上士幌自然保護官事務所の原澤翔太自然保護官は「南沼の携帯トイレを活用してもらうのが大切。普及啓発を図っていきたい」と話す。

山のトイレマナー5カ条

- ▶山に入る前にはトイレへ行く
 - ▶新得町のトムラウシ登山口にはトイレがある
 - ▶できるだけトイレで用を足そう
 - ▶トイレにゴミは捨てないで
 - ▶使用済みの紙は必ず持ち帰ろう
 - ▶携帯トイレも使ってみよう
- 「山のトイレを考える会」監修

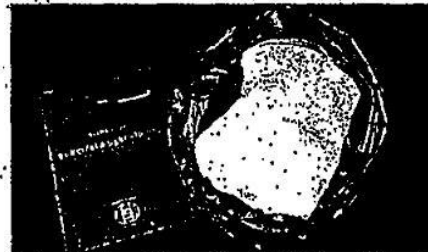
南沼のトイレ問題を知らせるパネルを展示し、登山者に携帯トイレの使用を呼び掛ける原澤自然保護官(左) 11日朝、トムラウシ山短

携帯トイレ普及への取り組み

6日午前3時すぎ、新得町のトムラウシ山短絡登山口。まだ薄暗い中、ヘッドライトを付けた登山客が次々に登り始めていた。11日の「山の巨」を前に、環境省や同局の職員、地元の新得山居会が、入山者に携帯トイレを無料で配った。

無料配布活動展開
持参者も年々増加

入山者書き込みブースの前で、原澤自然保護官が「携帯トイレは持っていますか」と登山客に声を掛け



シートがついた携帯トイレ(右)と使用後にトイ

では、岩陰でのトイレも減らない恐れがある。

「登山者のトイレに対する意識や人数などの把握ができていない」との指摘もある。十勝岳連峰の美瑛富士では、道内の登山者団体が「トイレ管理連絡会」を結成。昨年からは避難小屋横に携帯トイレブースを設置して試験的に運用を始めた。各団体が当番制で利用状況を巡回したり、行政の協力で登山客へのアンケートや利用者の統計を調べたりした。

同連絡会のメンバーで、道内の山

登山者巻き込んだ論議必要

配布した6、7の面目で足を止めた68人のうち、持っていないなかったのは32人。持っている人も予備として受け取り、森に入っていた。

麓の富田小中学校の子どもたちで結成する「トムラウシ少年クライミング」は、南沼のブース設置以前から、毎年夏に自分たちの登山に合せて園治で登山者に携帯トイレを手渡す活動を続けている。地元在住でサポート役を務める関谷達司さんは「年々、携帯トイレを持つ人は増えている」と実感する。

それでも排せつ物が放置される状況は変わらない。理由の一つとして、設置から14年がたつ携帯トイレブースの老朽化や、最大40張りのシートが並ぶ野営地で1度に1人しか利用できない点を指摘する声がある。

足りないブース
老朽化も著しく

関谷さんは「建て付けが悪くなり、扉を開けるにもひと苦労。便座も傾き、ずれたらうまく利用できない」と話す。ブース利用を促さない状況

のトイレマップやマナーガイドを配布する「山のトイレを考える会」(札幌市)の小枝正人副代表は「登山者の人数やピーク、意識に合わせたトイレのシステムを構築しなければ改善にはつながらない」と語る。

小枝副代表は「携帯トイレの利用は登山客で意識の差が大きい。行政側には当事者である登山者の意見も聞きながら、固定トイレなども含めトムラウシ山のトイレの在り方を議論してほしい」と話している。

(深津慶太)